

上海市街地、宝山区ウースイン・クリークに、日中戦争開戦時、日本軍が上陸した地点だそうだ。父もここに上陸したのだろうか？ 気持が高ぶる。当時の面影は無いと言う。野原だった陸地も、今は立派な公園市街地だ。河口を望み皆それぞれの思いを胸に手を合せ写真を撮る。初日の為か皆少し緊張している様だ。

ここで巡拝を終えホテルの一室にて慰霊祭が行われ、一日目がおわる。

明けて今日上海近郊の巡拝、バスにゆられ約一時間で宝山区羅店鎮地域に入れる。萩經クリーク、昭和十二年九月日本軍が敵を追撃、南京へ向け進行した地点だそうだ。南方梅宅、北梅宅、バラック建てみたいな民家や商店街だ。ここで全員胸に付けている名札をはずす。当地は危険なのだ。現地のガイドさんの指示にしたがう。なんとも言えない雰囲気だ。この付近で五家族の方の戦没地、川辺に下り、手を合わせ小石をそっとポケットに、人目をさけ植込に跪き合掌する人、持参したお水等をお供えし頭を下げ涙する人、民家の方から不思議そうに眺めていた、羅店鎮地域の慰靈を終へ、上海市街地、当時の第一海軍病院に。ここで一家族が戦病死されている、庭に入り芝に跪き、いつまでも建物を見つめていた。

ここからホテルに帰り、私の父の眠る戦没地、ここから遠く離れた浙江省寧波、現地は遠くて行けない、団長さんの提案で別室を借り受け、遙かなる南方の空、寧波に向かって私と弟の二人は父への思いを語りかけ手を合わせた。残念である。現地付近迄行けなくやしさ、これも運命を誦めなければならなかつた。関係者の慰靈祭も終わり今日も暮れる。

ひ父の没地に行きたいと言つております。日本を發つてフィリッピンの首都マニラに着き、ツゲガラオに着いた時、警察官の護衛のもとサンタマリアアパリと慰靈が進み翌日が私の父が没つしたリサールに着いた時は感慨無量でした。福山からのお供え物の酒、饅頭、おもち、水と供え慰靈祭が始まり、その時には涙が出てたまりませんでした。

当方は治安が良くないとの事で警察官の方々に大変お世話になり有りがたく思いました。また現地の日本人ガイドの方ツーリストそして、日本遺族会の方々に厚くお礼申し上げます。

政府主催の平成十六年度、第四次硫黄島遺骨収集調査派遣団（平成十六年二月十六日から三月一日）に日本遺族会の員として参加し、硫黄島に行つてきました。

硫黄島は東京から南へ一二五〇キロメートルの太平洋に浮かぶ孤島で、面積も二十二平方キロメートルの火山島で、この小さな島に数一〇〇個の地下壕が掘られ、その長さは十八キロメートルにも及ぶものです。

昭和二十年二月十六日から始まつた米軍による攻撃は熾烈を極め、地上の建造物は跡形もなく破壊されました。それでも日間に反撃し、一ヶ月間持ちこ

呉市遺族連合会 石田 宏

三日目のバスは上海都市交通高速道路を南京まで「三〇〇」キロ、市街地を抜け景色は広大な田畠、上海、蘇州と通り約四時間走った頃、南京に入る。ここで南京の旅行会社のバスに乗りかえ、ガイドも女性に南京地域の巡拝が始まること外で一家族の慰靈を終え、南京攻略戦の行われた。雨花台。南京城の中華門、四重の門をくぐり、楼上に登り街中を望み、五家族の皆様が巡拝された。顔に涙を浮かべ、手を合わせ、肩が震えていた。南京は対日感情の厳しい土地柄、ここでも名札をはずしての行動、仲間の一人が靖国問題を女性ガイドに語りかけた。口調が変わった。場所が悪い。行動に気をつけながら巡拝し、室での慰靈祭も無事終えた。

四日目の朝、南京大虐殺記念館を見学し、いろんなことを想定しながら戦争のみじめさを思い知らされる。今日は南京から空路南昌へ。着陸後バスで昌九高速道路を走り九江に向かう。広大な田畠、少数の民家が見える。途中立ち寄ったサバエスエリヤから世界遺産の名勝廬山の峰々が望まれた。父の便りにもあつたとカメラに収めていた。インターチェンジを降りて今日の宿、其士九江大酒店に到着。すぐ前に長江が流れ川面を船が行き交うのが見える行程の都合で巡拝が明日になる方々の慰靈祭が一室で行われ、これまでA班の個人慰靈祭は全て終わつた。

五日目、雨の中バスは今日の巡拝地、黃梅に向け長江大橋を渡る。雨に煙つて何にも見えない。渡り終え湖北省に入る。一時間ほどで黃梅近郊農家の家が並んで建つてある。民家の前で數十人の人々がバスの方を見ている。町はずれの人気の



たえましたが、米軍の圧倒的な火力の前に遂に玉碎し二万名を超す戦死者が出たそうです。

今回、私たち遺骨収集調査派遣団は、摺鉢山の麓にある独立歩兵第三一二大隊壕内と、千鳥ヶ原地区対空機関砲陣地郡跡地の二箇所で遺骨収集作業を行いました。

独立歩兵第三一二大隊壕内での作業は、はじめに埋もれた壕入り口の土砂やジャンブル化した周辺の雜木をパワーショベルで取り除き、小さな発電機と懷中電灯をたよりに壕内に入り、メイン通路の横に広がつたボケットと呼ばれる所をスコップと熊手で掘り下げ、遺骨の搜索をしました。

また、掘り出した土を手箕に入れ数人がリレーで壕外に運び出し、その土を精査し、小さな骨片や歯一本まで見つけるため収集作業にあたりました。

壕の入り口附近から赤く錆びた小銃と鉄兜が出てきました。鉄兜の中には頭蓋骨が入っていましたが、火炎放射器で焼かれたのか手に取ると崩れ落ちてしましました。「苦しかつたでしょうね」と遺骨に合掌しました。

独立歩兵第三一二大隊壕内からは、九柱の遺骨と多数の小銃、縊弾、銃剣、手榴弾、火薬、めがね、万年筆、靴、食器などが発掘されました。

遺骨収集作業はヘルメットに防塵マスクの装備で臨みました。壕内は人ひとりがやつと通れる狭い通路と、火山の熱気で何もしなくても汗が滴り落ちる中で、服は汗と土でどろどろになりながら進むと、天井には土の層に亀裂があり、いつ崩落するか分からない状況でしたが

「一柱でも多く連れて帰つてあげたい」という思いが強く、崩落の恐怖心は感じませんでした。

千鳥ヶ原地区対空機関砲陣地郡跡地は、平地であるが六十年の歳月の経過か

らトーチカも深く砂に埋まっておりまし

たが、ブルトーラーで砂を寄せ集め、スコップと熊手で砂山を崩しながらの作業になりました。

ここでは、頭から足の先端まで完全な姿の遺骨が一柱収骨されました。頭蓋

チカ周辺の人が居たと思われる所は、さ

らにスコップで掘り下げ、遺骨の搜索に

あたりました。

この場所でも十一柱の遺骨と多数の武

器と弾薬、生活用品が発掘されました。

六十年前の二月に熾烈な戦いが繰り広

げられたこの千鳥ヶ原、日陰もなく、三十度を超える炎天下での遺骨収集作業で

したが、補給路を断たれ食物も水もなく栄養失調状態で戦つた当時の兵士の苦労を想像すると、この暑さで音をあげるわけにはいかないと自分に言い聞かせながら、一柱でも多く遺骨を見つけてあげたい」という思いを強く感じました。

硫黄島の海は碧く鯨が海岸近くで潮を吹きながら群れをなし、振り向けば赤や

黄色の原色の美しい花が咲いている。

今日の平和と繁栄の礎となられた兵士

どんなにかこの日を待ち続けたことが、出来るのはだけ早く家族のもとに帰してあげたい」と思いながら作業にあたりました。

この場所でも十一柱の遺骨と多数の武器と弾薬、生活用品が発掘されました。

六十年前の二月に熾烈な戦いが繰り広げられたこの千鳥ヶ原、日陰もなく、三十度を超える炎天下での遺骨収集作業で

したが、補給路を断たれ食物も水もなく栄養失調状態で戦つた当時の兵士の苦労を想像すると、この暑さで音をあげるわけにはいかないと自分に言い聞かせながら、一柱でも多く遺骨を見つけてあげたい」という思いを強く感じました。

また、ボタンも元の位置に残つており、胸の辺りから印鑑と認識票が、足元には軍靴も出てきました。この方は六十年間

自分は昭和十七年七月生まれ。私が生まれた時は四人姉弟の四番目で始めての男子だったので喜んだ様です。自分は父の顔を覚えていません。昭和十九年六月、二回目の出征をして行きました。出征する時に今度はもう福山の地をふむことが出来ないかもしれない家族に話した様です。

今回の慰靈の旅は私が最初に行かしていただいたのですが、次回は姉たちもぜひ



フィリッピン慰靈の旅を終えて
福山市 片岡 忠義

日本大使館訪問。現在の北京は自動車が多い。道路は渋滞。少し遅れて到着。門外で書記官が出迎えてくださった。館内に案内され、領事部長、書記官と懇談。お供え物と写真を胸に山の彼方へ遙拝され終わつて来た路を逆ルートで南昌に向かう。南昌市内に入り、週恩来ら各面軍が武装蜂起した町、起義記念館を見学しホテルに。

これで五日間の慰靈巡拝は皆無事に終わつた。この日で見たい、父の戦没地、積年の思いを戦後六十年たつた今、やつて叶い胸のつかえが晴れました。一緒に泣きながら巡拝し、室での慰靈祭も無事終えた。

日時は変わつて南昌から空路北京に。降り立つた北京は寒い。今日の予定は、加した全員、各地域でそれぞれの思いを綴った追悼文を読み父への誠を捧げた慰靈であつた。

日時は変わつて南昌から空路北京に。降り立つた北京は寒い。今日の予定は、加した全員、各地域でそれぞれの思いを綴った追悼文を読み父への誠を捧げた慰靈であつた。

これが五日間の慰靈巡拝は皆無事に終わつた。この日で見たい、父の戦没地、積年の思いを戦後六十年たつた今、やつて叶い胸のつかえが晴れました。一緒に泣きながら巡拝し、室での慰靈祭も無事終えた。

久の歴史を感じながら散策し、慰靈巡拝に参りましよう。追悼文を読む顔にも、涙に溢れ声にならなかつた。私を含め、参加した全員、各地域でそれぞれの思いを綴った追悼文を読み父への誠を捧げた慰靈であつた。

これが五日間の慰靈巡拝は皆無事に終わつた。この日で見たい、父の戦没地、積年の思いを戦後六十年たつた今、やつて叶い胸のつかえが晴れました。一緒に泣きながら巡拝し、室での慰靈祭も無事終えた。

日本大使館訪問。現在の北京は自動車が多い。道路は渋滞。少し遅れて到着。門外で書記官が出迎えてくださった。館内に案内され、領事部長、書記官と懇談。森田團長から慰靈巡拝の意義と歴史について説明。対日意識について等々意見交換され三十分程の表敬訪問を終えた。また万里の長城を見学し周辺の小高い丘に植林活動も行う。夕方から各班交流し、お供え物と写真を胸に山の彼方へ遙拝され終わつた。

「在中国日本國大使館」「中華全國青年連合会」の方々を招いて懇親会が行われ、以後も益々の日中友好関係が深まることが案内され、領事部長、書記官と懇談。植林活動も行う。夕方から各班交流し、お供え物と写真を胸に山の彼方へ遙拝され終わつた。

帰国の日、天壇公園、天安門と中国悠久の歴史を感じながら散策し、慰靈巡拝して見た現地を思い出し、今の日本の平和と命の大切さを改めて感じると共に、祖國の礎となつた尊い犠牲があつた事実を忘れてはならないと、心に誓いながら旅を終え帰国しました。

帰国の日、天壇公園、天安門と中国悠久の歴史を感じながら散策し、慰靈巡拝して見た現地を思い出し、今の日本の平和と命の大切さを改めて感じると共に、祖國の礎となつた尊い犠牲があつた事実を忘れてはならないと、心に誓いながら旅を終え帰国しました。

日本大使館訪問。現在の北京は自動車が多い。道路は渋滞。少し遅れて到着。門外で書記官が出迎えてくださった。館内に案内され、領事部長、書記官と懇談。森田團長から慰靈巡拝の意義と歴史について説明。対日意識について等々意見交換され三十分程の表敬訪問を終えた。また万里の長城を見学し周辺の小高い丘に植林活動も行う。夕方から各班交流し、お供え物と写真を胸に山の彼方へ遙拝され終わつた。

「在中国日本國大使館」「中華全國青年連合会」の方々を招いて懇親会が行われ、以後も益々の日中友好関係が深まることが案内され、領事部長、書記官と懇談。植林活動も行う。夕方から各班交流し、お供え物と写真を胸に山の彼方へ遙拝され終わつた。

帰国の日、天壇公園、天安門と中国悠久の歴史を感じながら散策し、慰靈巡拝して見た現地を思い出し、今の日本の平和と命の大切さを改めて感じると共に、祖國の礎となつた尊い犠牲があつた事実を忘れてはならないと、心に誓いながら旅を終え帰国しました。

帰国の日、天壇公園、天安門と中国悠久の歴史を感じながら散策し、慰靈巡拝して見た現地を思い出し、今の日本の平和と命の大切さを改めて感じると共に、祖國の礎となつた尊い犠牲があつた事実を忘れてはならないと、心に誓いながら旅を終え帰国しました。

日本大使館訪問。現在の北京は自動車が多い。道路は渋滞。少し遅れて到着。門外で書記官が出迎えてくださった。館内に案内され、領事部長、書記官と懇談。森田團長から慰靈巡拝の意義と歴史について説明。対日意識について等々意見交換され三十分程の表敬訪問を終えた。また万里の長城を見学し周辺の小高い丘に植林活動も行う。夕方から各班交流し、お供え物と写真を胸に山の彼方へ遙拝され終わつた。

「出来るのはだけ早く家族のもとに帰してあげたい」と思いながら作業にあたりました。

この場所でも十一柱の遺骨と多数の武器と弾薬、生活用品が発掘されました。

六十年前の二月に熾烈な戦いが繰り広げられたこの千鳥ヶ原、日陰もなく、三十度を超える炎天下での遺骨収集作業で

したが、補給路を断たれ食物も水もなく栄養失調状態で戦つた当時の兵士の苦労を想像すると、この暑さで音をあげるわけにはいかないと自分に言い聞かせながら、一柱でも多く遺骨を見つけてあげたい」という思いを強く感じました。

また、ボタンも元の位置に残つており、胸の辺りから印鑑と認識票が、足元には軍靴も出てきました。この方は六十年間

自分が昭和十七年七月生まれ。私が生まれた時は四人姉弟の四番目で始めての男子だったので喜んだ様です。自分は父の顔を覚えていません。昭和十九年六月、二回目の出征をして行きました。出征する時に今度はもう福山の地をふむことが出来ないかもしれない家族に話した様です。

今回の慰靈の旅は私が最初に行かしていただいたのですが、次回は姉たちもぜひ

日本大使館訪問。現在の北京は自動車が多い。道路は渋滞。少し遅れて到着。門外で書記官が出迎えてくださった。館内に案内され、領事部長、書記官と懇談。森田團長から慰靈巡拝の意義と歴史について説明。対日意識について等々意見交換され三十分程の表敬訪問を終えた。また万里の長城を見学し周辺の小高い丘に植林活動も行う。夕方から各班交流し、お供え物と写真を胸に山の彼方へ遙拝され終わつた。

「出来るのはだけ早く家族のもとに帰してあげたい」と思いながら作業にあたりました。

この場所でも十一柱の遺骨と多数の武器と弾薬、生活用品が発掘されました。

六十年前の二月に熾烈な戦いが繰り広げられたこの千鳥ヶ原、日陰もなく、三十度を超える炎天下での遺骨収集作業で

したが、補給路を断たれ食物も水もなく栄養失調状態で戦つた当時の兵士の苦労を想像すると、この暑さで音をあげるわけにはいかないと自分に言い聞かせながら、一柱でも多く遺骨を見つけてあげたい」という思いを強く感じました。

また、ボタンも元の位置に残つており、胸の辺りから印鑑と認識票が、足元には軍靴も出てきました。この方は六十年間

自分が昭和十七年七月生まれ。私が生まれた時は四人姉弟の四番目で始めての男子だったので喜んだ様です。自分は父の顔を覚えていません。昭和十九年六月、二回目の出征をして行きました。出征する時に今度はもう福山の地をふむことが出来ないかもしれない家族に話した様です。

今回の慰靈の旅は私が最初に行かしていただいたのですが、次回は姉たちもぜひ

日本大使館訪問。現在の北京は自動車が多い。道路は渋滞。少し遅れて到着。門外で書記官が出迎えてくださった。館内に案内され、領事部長、書記官と懇談。森田團長から慰靈巡拝の意義と歴史について説明。対日意識について等々意見交換され三十分程の表敬訪問を終えた。また万里の長城を見学し周辺